

「パキスタンにおけるイクバル研究の現状と課題」

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 特任研究員

松田和憲

ムハンマド・イクバルは20世紀南アジアを代表するウルドゥー語、ペルシア語詩人であり、パキスタンでは建国詩人、大学者と見なされている。イクバルの詩想／思想は現代社会に生きるムスリムたちの中で今なお輝きを放ち続けており、彼の詩集や著作は様々な言語に翻訳され、南アジアを越えてイスラーム世界全体に広く読み継がれている。本発表ではイクバルの生涯・著作、欧米や日本、パキスタンにおけるイクバル研究に焦点を当て発表を行った。

イクバルはラーホールのガヴァメント・カレッジ在学中にウルドゥー語による作詩を始め、シャイフ・アブドゥル・カーディル(Shaikh Abdul Qādir)が編集長を務めるウルドゥー語雑誌『マフザン(Makhzan)』に作品を発表した。彼の詩作は形式的な恋愛叙事詩「ガザル」の形式で郷土愛を歌っており、好評を博した。

その後、ガヴァメント・カレッジ時代の恩師であるトーマス・ウォーカー・アーノルド(Thomas Walker Arnold)の薦めで1905年から3年間ヨーロッパ留学に赴いた。この留学経験でイクバルは「西洋文化の深部の行き詰まりと文化的限界を自らの目で見抜き、イスラームと自我との一体性に目覚め」、インド・ナショナリズムから汎イスラーム主義に転向した。

1915年にペルシア語詩集『自我の秘密(Asrār-e Khūdī)』を出版。本書では自我の哲学を打ち出し、ニーチェ、ベルグソンの影響を受けつつ、ルーミーの詩形・韻律に倣い、汎イスラーム主義的な思想を詩で表現した。本詩集の重要性を世界的に著名なスーフィズム研究者ニコルソン(Reynold A. Nicholson)がいち早く見抜き、1920年に英訳を発表した。

1929年に南インド講演旅行を経て、1930年に講演集を出版。その増補版が1934年に出版された英語主著『イスラームにおける宗教思想の再構築(The Reconstruction of Religious Thought in Islam)』で、イスラーム哲学(スーフィズム)における知的基盤の再検討を行った。

また1930年ムスリム連盟アラーハーバード大会で彼はインド・ムスリムの独立国家構想を提示し、当時は無視されたものの、後にパキスタン運動の根拠として利用された。

1932年出版のペルシア語詩集『永遠の書(Jāvid Nāmah)』は息子の名にちなんで命名された詩集で、ミルトンの『失樂園』やダンテの『神曲』の作品構成を参考に、ルーミーによってイクバルが導かれる形式となっている。1935年には20世紀ウルドゥー文学の高傑作として見なされている『天使ガブリエルの翼(Bāl-e Jibrīl)』を出版した。

日本でのイクバル研究として、まず片岡弘次や松村耕光によるウルドゥー語詩集の翻訳が多数ある。加賀谷寛が1960年代にいち早く彼の思想を紹介し、昨今では西欧留

学前のウルドゥー詩研究、マウドゥーディーやアフガニスタンとの関係について焦点が当てられている。日本独自の研究として西田哲学との比較研究がある。

パキスタンではイクバルは尊崇の対象であり、「イクバル学」としてイクバル研究が推奨されている。特に文学研究において膨大な研究蓄積がある。1951年にイクバル・アカデミーが開設され、1977年には政府レベルでイクバル生誕100周年を記念し、国際会議が開かれた。1979年に息子のジャーヴェード・イクバル(Javed Iqbal)がイクバルの伝記として『生き生きした流れ(*Zindah Rūd*)』を出版。本書は最も信頼に足り詳細かつ正確なイクバルの伝記として評価されている。2022年1月現在ご存命の碩学として、ラフィーウッディーン・ハーシュミー博士(Rafi'uddīn Hāshīmī)や元東京外国語大学教員のムーヌッディーン・アキール博士(Mu'īn al-Dīn Aqīl)がおられ、今も第一線でイクバル研究及び成果公表を行っている。

質疑応答として、イクバルの自我思想は西洋由来であるのかといった質問があった。

コメンテーターの登利谷正人先生からインド・パキスタン独立運動研究史におけるイクバルの位置づけについて補足説明をしていただいた。またパキスタン独立以後、大衆がイクバル思想をどのように認知していたのかを、当時のウルドゥー語大衆小説から分析ができることを有益な情報としてご教示いただいた。

伊達聖伸先生から、フランスの現代ムスリム思想家の研究書において、パキスタン人のファズルラフマーン(Fazlur Rahman)もイクバルに関する記述を残しているとのこと指摘を頂いた。彼はアユーブ・ハーン軍事政権時代に国民のイスラーム化を進めるイスラーム研究所の所長として招かれたものの、彼の近代主義的解釈に対してウラマーたちが反発し、軍事政権の力が弱まるとその立場と国を追われ、アメリカに亡命した人物である。彼のイクバル評価は現在のパキスタンにおいてあまり考慮されていないものの、イクバル研究史を時代背景に加えて歴代政権との関係性から捉えなおす必要性を感じた。